

早期音楽教育について

～早期音楽教育に携わる指導者像と扱うべき内容～

高瀬 健一郎

キーワード：早期音楽教育 指導者像 ピアノの先生

はじめに

大学等で音楽を専攻した者の進路に、「ピアノの先生」がある。

ひとくちにピアノの先生といっても、音楽を専門とする大学や高校への進学を考えるような目標がかなり高い者に指導するケース、基礎的なことは学び終えて更に高い次元を目指してピアノを続けている者に指導するケース、そして、楽譜の読み方も何もわからない初心者に指導するケース、また、大人になってからピアノを習い始めた者に指導するケースもあり、その幅はかなり広い。

受験準備や基礎的な学習を終えた層に指導する場合、指導者は自分がそれまでに受けてきた「レッスン」をそのまま応用でき、要求レベルを設定する要領を除けば、さほど大きな困難は生じない。

しかし初心者を対象とする場合、「何となく試行錯誤しながら」指導方法を探っていくことが多いのではないだろうか？ 指導者自身も初歩的な指導を受けてきたはずだが、その記憶が残っていることはまずないだろうし、例えば教員免許を受ける場合のように、指導方法を学ぶシステムが確立されているわけでもないからだ。

本論では、主に子どもの初心者を対象とする「ピアノの先生」に焦点を絞り、具体的な方法論に入る前の基礎として、求められる役割・姿勢・現実等について改めて確認・整理し、指導者としての活動を始める者の一助とすることを目的としたい。

I：先生とは

「先生」と呼ばれる職業に就くにあたり、心に留めておかなければならないことがある。音楽やピアノ等の音楽教育の分野に入る前に、そのことについて整理しておきたい。

①常に勉強を続けている存在

「先生」と呼ばれる職業に、教師、医師、弁護士等がある。いずれも、先例と自分の経験を合わせ考えながら、正しい方向へ教え導いていくことが仕事であり、常に勉強が必要な仕事である。

医師を例にとるとわかりやすいだろうか。患者の訴える症状から該当する様々な病気を瞬時にリストアップし、その中から病名を確定、その患者に合った治療法を選択する。新しい病気が発見されたり、一定の症状に対する病名が新たに確定したり、新しい薬が開発されたり、副作用が出て薬の使用が禁止されたりなど、適切な診断と治療のためには、病気とその症状と治療法について常に新しい情報を得ていること＝勉強を続けていることが必要であ

る。

また、専門家でない患者にわかりやすいように、医学用語を一般向けに翻訳して説明する力も求められる。

さらに、自分が持っている能力・設備でどこまで診断・治療ができるのかを適切に判断し、必要であればより高度なレベルの施設に送るといった、自分が責任持てる範囲を判断する力も重要である。

ピアノを教えていて人の命を預かることはないが、仕事の内容はほぼ同じと言える。

生徒の状態（症状）からつまづいていることや問題点を指摘（病名を確定）し、生徒に合った助言や解決方法を提示する（治療法を選択）。

自分の知らない楽曲を新たに知れば、選曲の幅を広げ、より適切な課題を与えることができ、新しい指導法や教則本の刊行もある。運指や練習方法の助言のために自分自身がピアノを弾いていることも必要で、常に勉強を続けていることが必要である。

②尊敬され、信頼される存在

生徒にとって先生とは、夢であり、目標である。単純に言えば「あんなすごい曲が弾けて、先生ってすごいな」「私も先生みたいになりたいな」という気持ちを、生徒が抱くような存在であり続けなければならない。発表会はその準備段階から多忙を極めるが、指導者が演奏することは必要であろう。発表会は生徒にとっても指導者にとってもステップアップのチャンスであり、夢を与える機会でもある。そして何よりも、毎回のレッスンで実際に弾いて聴かせることが重要である。

一方、「先生」である以上、助言・指導に従ってもらわなければならない。

子どもは純粋に「先生」として尊敬し、それなりに言うことをきいてくれるかもしれないが、保護者から信頼を得ることは容易ではない。さらに、保護者が先生に持つ印象（信頼度）は、その子どもにも必ず影響する厄介なものだ。

保護者から見て大学を卒業したばかりの先生は、人間としても社会人としても未熟である。成人に達したとはいえ、学生時代は家族に保護される存在であった指導者に対し、保護者は一般的に年上であろうし、結婚と子育ての経験も持っていて、人生の先を歩んでいることは間違いない。近所や親戚と付き合い、家庭を切り盛りし、幼稚園等や小学校で先生と呼ばれる人との付き合いもあり、経験値は指導者を明らかに上回っている。さらに困ったことに、指導者は音楽の教師としても未熟である。

そのような中で信頼されるためには、努力が必要である。ワークブックのような机上の課題とピアノで弾く楽曲とのいずれも場合も教材を良く研究し、子どもが間違えそうなところ、問題となりそうなところを予想し、その解決方法を複数考え、子どもにわかりやすい説明の方法・手順をあらかじめ考えておかなければならない。特に楽曲の場合は、初心者用の簡単な（指導者が初見で弾ける）ものであっても、子どもの手を想定しながら必ず自身で弾いて問題点を探るとともに、良い音で表情豊かに弾けるよう練習しておかなければならない。

音楽に関する分野で高い知識と技術を求められるのは当然だが、自分の大切な子どもを託すのであるから、社会人としての要求も高い。

卑屈でも尊大でもない、しかし自信ある態度で（自信が持てるよう事前に充分準備しておかなければならない）、様々な説明は短くしかし漏れのないよう要領よく、しかも時機を失

することのないよう、相手の立場に立って考えなくてはならない。その際には敬語等の言葉づかい、文書の場合は誤字等にも注意し、一定の事務的な能力も求められる。身に付けるアクセサリーや服装等にも注意を払い、信頼されたか否か、全てが総合的に影響する。

生徒は、手を替え品を替え教えていっても指導者の思い通りにならない。特に、練習してこない、言われたことをやって来ない、集中できないとなると、その矛先を親に向けがちである。しかし、保護者は人生の先輩であり、常に敬意を持って接することを忘れてはならない。指導者がいかに十分な準備して臨んだとしてもミスが必ず起こるだろうが、その時に許してもらえるか、信頼を失わずにすむかは、その基本的な姿勢によるだろう。

II：ピアノが早期教育に用いられる理由

早期音楽教育では、ほとんどの場合ピアノや電子オルガンといった鍵盤楽器が用いられる。すなわち、ピアノを習い始める時は、専門的な音楽教育を初めて受ける時と同じと言える。

日本の早期音楽教育では、楽器メーカーが運営する音楽教室が大きな役割を担っているが、鍵盤楽器が用いられるのはそのためだけではなく、鍵盤楽器の持つ特性が音楽早期教育に適しているからこそにはかならない。

なぜ鍵盤楽器が早期教育に用いられるのか。利用できる部分を積極的に活用し、また、弱い部分を補うために、鍵盤楽器（ピアノ、電子ピアノ・オルガン等）が持つ早期教育に適した部分とそうでない部分の特徴を整理して特性を理解したい。

①ピアノの特長

誰でも音を鳴らせること、常に正しい音程が鳴ること、鍵盤上で音・音程を視覚的に見ることができること、一度に複数の音を鳴らせることの4点は、初心者の子どもに教える上で明らかに優れている点といって良いだろう。

リードやマウスピースを使う管楽器は、音が出せるようになるまでが一苦勞。楽器の大きさや重量の問題もある。弦楽器の場合、音を出すことはできるだろうが、初心者が出すそれは「良い音」とは言い難いだろう。ピアノは鍵盤の上を猫が歩いても音が鳴るし、叩いたりしない限りはそこそこ良い音が出せる。

フレットのない弦楽器にとって、音程を正しくとめることは専門的に学んでいさえ難しいし、塞ぐ穴やピストン等の操作で管の長さを変える管楽器はピアノに近いが、口のコントロールが欠かせない。ピアノは（調律がしっかりしていればという条件付きだが）鍵盤に対応した正しい音を常に鳴らすことができ、電子ピアノに至ってはその調律さえ必要ない。

弦楽器は音の位置を視覚的に見ることはできない。管楽器も、ピストン等がある楽器は管の長さの変化を視覚的に見ることは難しいし、押さえるキーと塞がる穴が離れていたり複雑な動きをする楽器は問題外。単純なリコーダーでさえ（調性によっては左右されるが）音の配列に沿って塞ぐべき穴が規則的に並んでいるとは限らない。ピアノもC-durから離れて調号が増えるに従って困難が生じていくが、半音ずつ規則的に並んでいる点は、視覚的な面でわかりやすいと言ってよいだろう。

管楽器は基本的に1つの音しか発音できないし、弦楽器は単音しかというわけではないが、音程（左手）の困難が大きく、2音が自由に動くというわけにはいかない。

一方ピアノにも子どもの手の大きさと鍵盤の幅の問題、即ち「どこまで届くか」という問

題がある。オクターブの間隔は 17cm ほどもあり、体格にもよるが小学校高学年にならないと届かないし、幼稚園児などの小さな手では 3 和音を押さえることさえ難しい。この点に限れば、様々なスケールの楽器を用いる弦楽器の方が勝っているようだ。

更に、複雑になったアクションのために鍵盤が重く、手が未発達の状態にある子どもにとって、鍵盤を押さえることさえ、なかなか大変である。

しかし特徴を全体的に見たとき、ピアノには早期教育における難点よりもはるかに多くの適性があると考えてよいだろう。

②ピアノの弱点

一方、ピアノ（今度は電子オルガン等は含まない）という楽器そのものが持つ欠点も把握しておく必要がある。その中で最大のものは、音を美しく繋げることが苦手ということである。

鍵盤楽器に分類されるピアノだが、発音機構は弦をハンマーで叩いて発音する打楽器である。打楽器である以上 1 つ 1 つの発音は粒立ち、更に発音と同時に減衰していくため、音と音を滑らかにつなげるレガートは非常に難しい。声楽、管楽器、弦楽器、どの楽器とアンサンブルしても、特に緩徐楽章では絶望的な気分になる。

特に初心者のタッチではレガートは不可能であり、指導者はそれをしっかりと自覚しておく必要がある。それを補うためにピアノ以外の楽器を用いる必要があり、子どもの場合は「歌うこと」を必ず併用すべきである。

また近年は、自宅にピアノではなく電子ピアノを持つケースが増えている。タッチ等の演奏感覚はなかなか実物に及ばないが、オルガンやチェンバロといった音を選択できる機種も多い。音の立ち上がりはどうにもならないが、オルガンモードを使えば、音が持続する感覚は体験できる。また、持続音が多いコラールのような曲、或いは持続音の裏で他の声部が動く多旋律作品等をピアノとオルガンで弾き比べると、現れる表情の違いに驚かされる。この点からも、電子ピアノが持つ利点は積極的に活用すべきである。

Ⅲ：指導者と生徒、その保護者

指導者となる自分は、音楽を専門に勉強してきた「目標が高い層」である。一方、自分が指導する生徒は、中にはピアノに打ち込んで熱心に練習してくる高い意識を持った者もいるかもしれないが、多くはそうではない。

まずは、自分が体験してきた音楽に対する姿勢と生徒のそれとのギャップを、理解しておく必要がある。

①保護者

子どもを音楽教室に通わせる理由は「音楽を自分もやってきたから」「自分は習い事をあきらめる他なかったから」、また音楽という上品なイメージから「躾やマナー教育を求めて」など、多様である。しかし、一般的には、どんな方面に才能を発揮するかわからないので、その「候補の一つとして音楽を」やらせておきたい、或いは「感性を伸ばすための手段」として音楽をという動機が、又、実利的には、小学校に入れば音楽という教科があるので「教養程度に楽譜は読めて欲しい」という動機が、多くを占めるのではないだろうか。

ここで自覚しておきたいのは、親として我が子にける思い（期待）はいろいろあるが「音楽に興味（才能）を示すかどうか様子を見ている段階」で、ピアノが上手になることはまだ主たる目的ではないことだ。感性を伸ばしたい、楽譜を読めるようにしたいという目的で音楽を習わせているのであって、その手段としてピアノを使っているに過ぎない。「音楽教室」であって、「ピアノ教室」ではないのだ。

一方、上達には家庭での練習が不可欠である。「目標が高い層」である指導者にとって当然のことだが、初心者層の保護者がその前提に立っているかということ、必ずしもそうではない。

音楽以外の習い事の場合、その教室に通った時の指導だけで上達していく。わかりやすい例として挙げると、スイミングスクールに通っている一般的な子どもは、週に1回程度通うスクールで受ける指導だけで泳ぎをおぼえて上達し、自宅で練習することはない。このような習い事と同列に考えられてしまうと、毎日の家庭での練習が必要であることが習い事をする時の「当然」では決してないことが理解できるだろう。

また、家庭での練習に保護者が関わって欲しいのだが、特に保護者が音楽に縁遠かった場合は、保護者に関わるつもりがあったとしても、何をしたら良いのか判らないだろう。

家庭での練習習慣をつけるためにも、練習の監督という意味でも、保護者の協力が必要である。よって、練習を毎日重ねなければならない理由、また、どんな点をどのように気をつけてみて欲しいのかなどを説明して理解してもらい、保護者に対する啓蒙も必要になる。

ただし、仕事を持っていたり、専業主婦であっても家事があり、兄弟がいれば習い事の送り迎えだけでも多くの時間を割かれるなど保護者も忙しく、ピアノにだけ集中して力を注いでくれるわけではないことをよくわきまえ、慎重に働きかけなくてはならない。

②生徒

生徒は、歌うのが好きだったり楽器を弾いてみたいという希望は持っているが、楽譜の読み方や音楽のルールなどには初めて触れる、音楽に関する知識はまったくない状態と考えて良いだろう。指導者にとって「あたりまえ」のことを全く知らない状態であり、指導者は教える順番を慎重に考える必要がある。

音楽大学にまで進んだ自分は、音楽にかなりの比重をかけて過ごしてきた実体験がある。記憶が新しい大学での生活は特にそうであったろう。

一方、自分が指導する生徒は音楽以外にも平行して習い事に通っていることが多く、音楽に対する意識が他のそれと比べて特に高いわけではない。生命を守る意味合いもあるスイミングには幼稚園等の早い時期から通うケースも少なくないし、小学生になれば宿題もあるし、習字や塾など習い事が増えることも多く、スポーツ系であれば活動が週に複数回あるなど、友人と遊ぶ機会を見つけることさえ難しいほどだ。

子どもなりに忙しく、かつ、持続して集中することが難しい年齢層であることを考えると、少ない作業で最大の効果を得るような「効率の良い練習」が必要である。「練習してこないからうまくならない」のではなく、問題点を正しく最優先すべき順に指摘して、その適切で具体的な解決方法を提示し、苦労は少なく早く上達できるようにしなければならない。

音楽を始めたきっかけに目を向けると、保護者の意思で音楽教室に通わせ始めた場合でも、子どもに何らかのきっかけを与え、子どもの「やりたい」という言葉を引きだしてから通わせているケースが多いだろう。保護者なりに「動機付け」を行っているわけだ。その場合、「おもしろそう」「ステージに出たい」「きれいなドレスを着たい」等、当たり前のことであるが、前向きな「楽しいこと」が動機になる。

一方、指導者たる自分はどうか。一番最初の楽しい動機はすっかり忘れ去り、ステージに立つためには毎日練習を重ね、その練習は楽しいというより辛く苦しいもので、自分が困難に打ち勝ちがんばってきたかということが充実して楽しかった記憶として残っていて、ともするとそれを生徒に要求するようになっていないだろうか？

「目標が高い層」である指導者自身は、演奏してそれを聴いてもらえる喜び、あるいは難しい曲に挑戦して演奏できた喜びなどの楽しい実体験があり、苦労の先に何があるかを知っているから苦しい道に挑むことができる。しかし、音楽に触れたばかりの初心者、そのようなことは未経験か、体験数が少ない。にもかかわらず苦労だけが多ければ音楽は「つまらないもの」になって興味が次第に失い、やがて自分が指導する生徒の数が減るということにつながっていく。

そのようなにならないために、最初の動機が「楽しいこと」であることを忘れずに、「音楽は楽しいものだ」ということを繰り返し経験させる、これが継続の力となる。

ピアノ演奏の上達が、感性を伸ばす上でも好ましいことは自明で、上手に演奏できるようになる必要はないということではもちろんない。ただ、演奏技術の上達ばかりに目が向いて、音楽が楽しいことであるという経験が二の次にならないよう、注意していなければならない。

特に自身がピアノを専攻した指導者の場合は、ピアノが上手に弾けるようになることに重点が偏りがちになり、バランスに注意すべきである。

適切で具体的な助言は、生徒を少ない苦労で上達させることができ、それは「楽しい」体験として蓄積される。そのような体験ができる発表会等イベントの設定も必要となろうし、指導者が舞台上で演奏して生徒に「私もあんな風になりたい」という夢を与え、動機付けを強化することも必要だろう。

IV：教育活動の基本

その人の能力を伸ばすために働きかけ、知識や技術を身に付けさせる。この「働きかけ」こそそれぞれの指導者の工夫のしどころであり、腕の見せ所でもある。

しかし、指導者がいくら熱心に働きかけても、それを受け入れる気持ちが生徒になれば思うような成果はあがらない。先生は頭に血が上り、生徒のやる気は下がるばかりという不幸な状態に陥るだけだ。

そのような「一方通行」にならないために、人が学ぼうとする姿勢を持つのはどんな時なのかを考え、さらに教育活動のサイクルを整理し、全ての教育活動の根底としたい。

①興味を持たせる

世界中の国々の国旗と国名を答えられたり、星座とそれを構成する星の名前まで答えられる子供がテレビに登場したりする。100を超えるアニメのキャラクターや秘密の道具について、名前と種類や特技・機能も憶えてしまうし、お人形の家族・親戚やそれぞれの性格など

の設定も憶えてしまう。そのような子どもは特に珍しくもなく、それぞれの子どもが何らかの分野で天才ぶりを発揮しているといっても過言ではない。

では、それらの子どもはなぜそんな大量の情報を覚えることができるのか。それは、「興味を持っているから」にほかならない。

教え方も大切であるが、その教えを受け入れる態勢を作るのは「興味を持っているか否か」であり、教え方以上に大切とも言える「興味を持たせる過程」が、教える以前、あるいは教えることの一環にあることがわかる。

年齢が進めば、興味がなくても「希望の進路に進むためには、この教科も学習する必要がある」「この分野も一定の成績をとらないと合格できない」など、学習への動機付けができるが、幼い子どもにそのようなことは期待できない。

興味を持たせるためにどうしたら良いかを法則のように定義することはできないが、生徒に「どうしてだろう」「どうなるかな」といった「? (はてな) の気持ち」を持たせることと、「関心を持っているのは何か」をつかむことの2点は、基本と考えて良いだろう。

大学の大教室で行われる講義のような一方通行の方式ではなく、生徒を問題提起と解決のプロセスに常に巻き込んで、「どうしてそうなるの?」「どうしたらできるようになるの?」という気持ちを持たせるようにしたい。

興味付けには、わくわく感の演出も欠かせない。何より指導者による雰囲気への盛り上げが必要であるし、色使いや絵などの教材の雰囲気、そしてカードをめくったりといった仕掛けなど、工夫のしどころは至る所にある。

一方、関心がどこに向いているのかは、子どもの様子を良く観察することによって把握できる。文字を書きたくてしょうがない子、絵を描くのが好きな子、音符の形、音の高低、リズム、様々な楽器の音の違いなど、関心を向ける対象は千差万別。生徒が面白いと感じるものをよりどころに教えていけばよく、教えることは同じでもその方法は限りない。

子供は驚くほどの集中力を発揮する一方、関心を失ってしまうと打つ手がない。関心が向くような誘導も必要であるし、どうしても関心を持たない場合は、その回で扱う内容を変更するといった柔軟性も持ち合わせていなくてはならない。

②達成感（成功体験）

興味づけが入口とすると、「できた!」という喜び、すなわち達成感が出口となる。この成功体験は「快感」であり、「できる」という自信につながって次に学ぶことへの意欲を生む。

人が生まれて表情が出て、やがて立って歩けるように、しゃべれるように、絵を描き字を書けるようになる時期は、成長に伴って何かできるようになれば褒められ、喜んでもらった。

中学高校での部活動や実技の練習など「達成感を得るためには努力の積み重ねが必要」という経験の方が指導者にとっては新しく、指導者は生徒にもそれを求めがちであるが、先に触れたように、成功体験が少ない初心者には理解しがたい。

教育には、単純に言って負荷を与える方法と褒める方法とがあるが、初心者には後者に立って成功体験を積み重ねることに重きを置くべきであろう。

達成感を味わう機会は大きな期間で考えれば発表会などがあたるが、小さなものは、音符の名前をおぼえた、楽語の意味を答えられた、譜読みができた、弾けなかったことができるようになったなど、毎回のレッスンの中での1つ1つの課題解決にある。

一方、成功体験を得るはずが、失敗体験になってしまっは元も子もない。そのような過ちを犯さないために、課題をその生徒にとって快感を得られかつ失敗しないという適切な難易度に設定し、課題解決を正しい方向に導くための適切な助言を適切な時機に与えること、そして正しい答えを導きだせるようなしかけ作りが必要で、特に指導者が経験不足である場合は慎重に考慮する必要がある。

③教育のサイクル

結果（できたかできないか）ではなく過程（がんばったこと）を観点とすれば、いくらでも褒め讃えることができる。しかし、それは厳密な意味での成功体験（できるようになった、自分でできた）ではなく代償である。また、教えた後にそれが身に付いたかどうかを確認して然るべき処置をしなければ、学習の効果はあがらない。

そこで、教えた結果「〇〇ができるようになる」という到達線、難しく言えば達成基準（到達目標）が必要となり、そのラインに達するための道具・方法・しかけに、知恵を絞ることになる。

教育活動は、「教える」「確認する」「評価する」という1つのサイクルを繰り返されることによって、行われる（右図）。

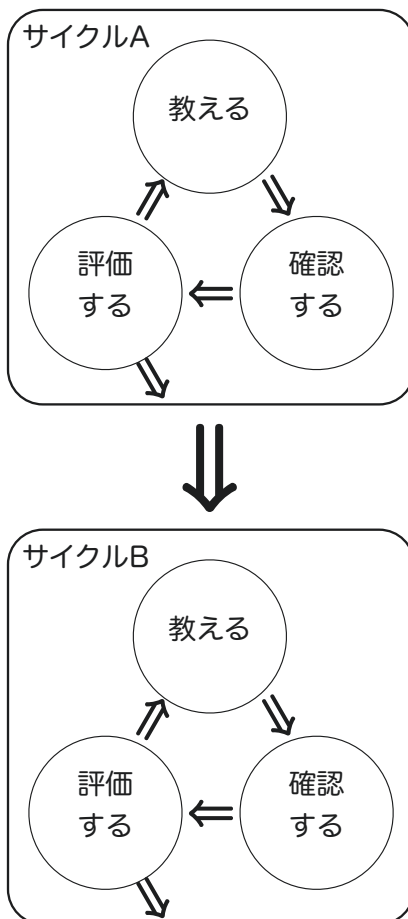
「1つの学期や単元の授業を行い（教える）、期末試験や小テストがあり（確認する）成績をつける（評価する）」という例がわかりやすい。

「確認する」では、「理解できたかできていないか」「できるようになったか否か」だけでなく、「何が理解できていないのか」と「正しく理解できなかったのはなぜか」の2点を明確に把握しなければならない。

「評価する」は「判断する」と読み替えてもよい。先にあげたサイクルの例は、1つが非常に大きい（長い）ので評価＝成績となったが、何かを教えるときに想定されるサイクルはずっと小さく、「先へ（次のサイクルへ）進むか、もう一度戻って教え直すかを判断する」ことになる。

当たり前のことだが、生徒がいつも模範的な（指導者が期待するような）答えを見つける訳でもなく、特に楽器の演奏技術の場合は100%満足するような結果はほとんど見込めないので、この「判断」は指導者に常につきまとい、悩みの種でもある。

また、教え始めたばかりの指導者は、計画した流れをこなすだけで精一杯で「判断」が無意識に抜けてしまい、よく考えずに先に進む状態となったり、生徒の理解度よりも計画通りに進行することを優先してしまったりなど、適切でない教育活動になって



しまうことも少なくないので、基本サイクルとしてしっかり押さえておかなければならない。

例えば、音符の名前を教えるとする。それを細分化すると、音符の形（図形）と名称を一致させるという行為であって、形の違いを教える A、名称を教える B、その 2 つを統合して形と名称を関連づける C の、3 つのサイクルが連なっている。

「この形が○分音符、こちらの形が○分音符」で済んでしまうことも多いかもしれないが、理解が遅い生徒の場合はまず形の違い（玉は白か黒か、旗の有無、棒の有無）を認識させ、次に名前を覚え、次にその 2 つを一致させるという手順が必要になる。

細かく想定しておいた手順を短く進めることは簡単だが、大まかに想定しておいた手順を、理解に問題が生じたときにその場で細分化することは難しい。

また、形の違いがわからないのか、名前をしっかりと覚えていないのかといった「問題箇所の特定」のため、そしてどんな順番で教えたら最もわかりやすいかという手順を考える上でも、小さなサイクルで考える準備は効果大きい。

④指導案

階名を教えるには五線や音部記号をその前に教える必要があり、拍子を教えるためには小節の概念を教える必要があるといったように、わかりやすく教えるためには手順を慎重に考える必要がある。しかし、頭の中だけで考えてもそのすべてを記憶しておくことは難しいし、何よりも問題点が見えにくい。そこで、紙にスケッチ（メモ）しながら構想を膨らめていくと良く、それを練り上げていくと「指導案」ができあがる。

指導案と言えば教職で用いるそれが連想され、実習生からは「指導案作りが大変だった」という話をよく聞くが、指導案に立派なことが書いてあっても、実際の指導が適切でなければ意味がなく、さらに、個人の教室で十数人を一度に教えることは考えにくい。個人指導の利点は、一対一、もしくは対数人という少人数制の中で、個々の生徒に臨機応変に対応することにある。

よって、ここでの指導案は「指導者が個々の生徒を念頭に手順と到達線をあらかじめ考え整理し、指導の目的を明確化するため」、そして「生徒に合わせて臨機応変に対応していく個人指導の中で、基本となる進行（本筋）へ戻るためのもの」と位置づけ、実利を優先したものでよい。すなわち、理論的なことを教える場合はその手順に重きをおき、ピアノ実技の場合はその作品研究や運指の面を充実させることになる。また、その指導にどんな教材や小道具が必要なのかを明記しておけば、指導者の忘れ物防止にもなる。

1 回の教育活動は「導入」「展開」「終結」に分かれる。

「導入」は、決まった歌（はじめの歌）を歌ったりなど、何らかの手段で生徒を音楽の世界に引き込むための時間、また、理論的に何か新しいことを教える回では、そのための興味付けを絡めているかもしれない。

「展開」は、先に述べた図で示した「サイクル」がいくつも連なっている部分。理論的なこと、ソルフェージュ、ピアノを弾くことなど様々な要素が含まれていて、生徒の理解の進み方によってはすべてを消化できないこともある。

「終結」は、次の回までにやってきてほしいこと、次の回に持ってきてほしいものの確認や、今回の指導をまとめ、自宅での練習でのポイントを保護者に説明することも含まれるだろう。

失敗体験にならないように段階を追って展開するが、教える順序を考える上でも、必要な

教材・小道具を考える上でも、「最終的に〇〇を教える。それを教えるためにはその前に△△を教える必要がある、そしてその前には～～」のように、最終到達線から遡って考えを進めると良い。

⑤まとめとして

理論的な学習は、自分の音楽を創り上げるための基礎的な知識となる。規則のような理屈を理解することはまだ難しい年齢であり、印象など、音楽的なアイデアに繋がるように配慮しながら教えていきたい。

毎回の指導は、指導者からみれば「授業」であるが、子供が受ける印象は「遊び」でありたい。「歌ったり弾いたりリズムをとったり、音符を書いたりして遊んでいたら、いつのまにか楽譜を読み、ピアノが弾けるようになっていた」という形が理想だろう。音楽教室へは「おけいこに通う」ではなく、「先生の家遊びに行く」感覚が望ましい。

音楽が好きな子供を育てる。その中から、演奏に才能を持つ子供の芽が伸びてくる。才能を持っていても、嫌いになってしまったらその道へは進んでももらえない。

一方、楽器演奏の実技教育は、まねすることから始まる。よって、指導のなかでほんの数小節弾いてあげる際にも、指導者は生徒の見本になるような水準を維持しているよう努めなくてはならない。

しかし、真似して指導者そっくりに演奏できるようになることが目的ではない。成長した生徒が自分の音楽を創り上げられるよう、最低限必要な「真似させる部分」と、生徒の個性を伸ばす「自由な部分」とを見極める力を持っていなければならない。そのような意味では、実技の指導は「教える」ことよりも「正しい方向づけをする」と考えた方が適切である。

V：音楽早期教育で扱うべき内容

音楽教室では主に鍵盤楽器が使われ、「ピアノのおけいこ」という名称に象徴されるように、指導者は演奏技術を教えると考えがちである。しかし、初めて音楽教室に通う生徒は、ピアノを弾くどころか楽譜の読み方からわからない、音楽教育に初めて触れる存在である。

よって、演奏法ではなく、五線譜の読み方やリズムの取り方などの音楽理論やソルフェージュといった「音楽の初歩」から教えなくてはならない。

しかしその範囲は非常に幅広く、しかも指導者にとっては「当たり前のこと」となっているので、順序立てて分かりやすく教えていくためには、慎重に考える必要がある。更に、ある程度理屈で教えていく部分と、感じさせて吸収する部分、機会ごとに触れて知識としてしみ込ませていく部分など、ひとくちに教えるといっても様々な方法をとる必要があるため、自分が教えていくべき内容をしっかりと把握しておく必要がある。

最後に、音楽を教える上で扱うべき内容を整理しておく。

楽典	五線、音部記号、音休符の長さ、小節、拍子、調性、変位記号、楽語
ソルフェージュ	歌う、聴く、書く、読む
和声	長三、短三和音、属七和音、V→Iの進行（緊張と開放の感覚）、終止
音楽史	作曲家について、時代背景、地理、楽器の発達、様式
奏法	姿勢、手の形、脱力、運指、音質、ペダル、（足台の必要性）
その他	練習方法、暗譜の方法

①楽典

理論として説明しながら教える部分と、変位記号や楽語のように、出てきたら随時教えていけば良いものがある。

音休符は、単に長さとして捉えるのではなく、重さのイメージも併せて持たせたい。

拍子は、拍子記号の意味など理論として教える必要があるが、強拍弱拍などその拍子を持つ雰囲気は、理論だけでなく、感覚として捉えられるよう工夫したい。

調性も、主音や調号の違いを理論的に憶えるだけでなく、その調が持つ雰囲気の違いに気付かせたい。初心者用の単旋律や数小節の楽曲であれば、指導者が楽譜と異なる調性（同主調や属調下屬調など）で弾いてあげて、その違いを感じ取る方法も考えられる。

音程は、長短完全の区別はまだ重要ではなく、その音程の間隔と、その幅を渡るために必要な時間やエネルギーの差を感じ取れるようにしたい。

新しい楽曲を与える時は、その生徒がまだ学習していない記号があるかあらかじめ確認し、必要に応じて事前に知識を与えておく。

②ソルフェージュ

音楽に欠かせない技能である。

歌う：専門の教材を使っても良いが、自分がピアノで演奏する楽曲のメロディーを歌わせることが、そのメロディーの雰囲気、フレーズ感、息使いを感じさせる上で効率的だろう。音程がとれない生徒、声が出ない生徒の場合は指導者が率先して歌い、生徒を促す必要がある。

聴く：指導者が叩いたりリズムを、歌ったりピアノで弾いたメロディーを叩いたり歌ったりする「真似っこ」から始めれば良い。聴き取ったことを生徒がピアノで再現するのは、歌って再現するより程度が高い。

書く：聴いたことを楽譜に書けば聴音になるが、数小節の旋律となると少々難しい。単音や数音を聴き取らせたり、音の長さだけを聴き取らせたり、難易度を下げる工夫が必要となる。また、拍子などと関連して、その小節に足りない音符を書かせることもできる。

読む：初見視唱・視奏を通して訓練できる。ピアノのおけいこでは、あらかじめ練習してきたことを弾くことになるので、初見に苦手意識を持つ生徒は少なくない。毎回初見を取り入れて「その場である程度形をつくる」訓練も必要である。知っている曲と初見の曲を混ぜて数曲の課題を用意したり、指導者が視唱の伴奏をしたり、連弾による視奏にするなど、音楽が停まって空白の時間が生まれないようにする工夫もできる。

③和声

和音の構造（長3度の上に短3度といったような）や、和音の連結を教えるという意味ではなく、和音を持つ色・雰囲気や、和音進行に伴う緊張と開放の感覚をつかむことが重要である。従って、楽曲の中で機会があるたびに触れるように心がけ、楽典のように理論的に教える必要はなく、長3、短3、属七、減七の4種類をしっかりと感じ取れるようにしたい。

三和音ではその和音の持つ明暗の雰囲気を感じ取らせ、七の和音では次の和音に進もうとする力（緊張感）と、解決してほっとする感覚を感じ取らせる。少し進んだら、導音や第7音などが進もうとしている方向も感じたい。

終止形は、全終止等のしっかりと終わる「句点」の役割、半終止や偽終止のような「読点」の役割といった雰囲気を含むことを重視し、偽終止では、その独特の進行に反応できるようにしたい。

④音楽史

これも大学での授業のように教えるのではなく、機会の度に触れるようにして、少しずつ染み込むように知識を吸収させていく。

最も重要なことは「様式」である。ロマン派の作品と古典派のそれとでは演奏スタイルが異なるし、同じ時代でも例えばモーツァルトとベートーヴェンとでは異なる。その違いを言葉で説明しようとしても難しく、指導者が弾いて聴かせることが重要となる。

演奏技術が充分でない習い始めの時期は、生徒がそのスタイルを弾き分けることはできないが、経験的に身に付けることなので、良いお手本を繰り返し耳にすることの効果大きい。指導者は油断せずに勉強を重ね、見本となるような演奏レベルを維持しなくてはならない。

大作曲家については、肖像画等を使ってその作曲家の顔を知り、そこからイメージを膨らめることもできるだろう。

レッスン室に地球儀や世界地図があれば、国の名前だけでなく、その位置も一緒に憶えてしまえる。

楽器の変遷では、チェンバロ等の楽器名を知るだけでなく、どんな音なのかを聴いて知っていることが必要であり、CD等を聴かせたり、あれば電子ピアノ等も活用できる。

⑤奏法

指導者にとって直近まで指導をうけていた分野で、手の大きさや指使いへの配慮に気がつければ、それほど大きな戸惑いはないだろう。

この分野で最も重要なことは、「耳を作る」ことである。姿勢、手、ペダル、いずれにしても良い音・響きを生み出すための工夫であって、良い音のイメージを持っていないければ、何を指導しても直らないだろう。この「良い音」も経験的に修得することで、指導者の不断の努力が求められる。

その他に心に留めておくべきは、成長期で体格の変化が早いことである。絶えず注意していないと、椅子や足台の高さがすぐに適切なものでなくなってしまう。また、手首の固さにはかなり幅があって、それはもしかすると個人の特性であって、指導によって矯正できる範囲には限界があるかもしれない。

重さを支える手の骨や筋肉が充分発達していない子どもは、体重をかけて弾くことが実は難しい。だからといって足をぶらぶらさせて弾くことを繰り返していると足を踏ん張って弾くことができなくなってしまうので、ピアノを始めたばかりの時期であっても、ペダルを使用しなくても、足台は使用することが望ましい。家庭では何かで代用するとしても、教室にはなくてはならない備品である。

爪の長さも適切に指導しなければならないが、どこまで切ると痛みを感じるかは人によって異なる上、小さな子どもが自分で切るとは思えないので、保護者と良く意志の疎通を図る必要がある。

VI：さいごに

指導者としての一般論から、音楽教育の環境、教える内容を整理してきた。

自分が歩んできた道や自分を理解し協力してくれた周囲と、生徒あるいは生徒の環境は全く異なることを自覚し、しかしその一方で楽しく、少しでも効率良くうまくなるように指導方法を工夫しなければならない。授業のように教える事柄はもちろん、「良い音」「様式感」のように、知らず知らずのうちに影響を与えるようなものも多くあり、早期教育に係わる指導者の責任は非常に重い。

生徒にとって良い目標・見本となるよう、常に事前準備を重ねていかなければならない。